

—韓日の新聞劇画の比較論

「林巨正」と「忘八武士道」における比較—

京都精華大学大学院芸術研究科博士課程
任蕙貞(イム・ヘジョン)/LEEM Hye Jeong



1950年代末、日本で生まれた劇画は、マンガ的と思われた笑いをなくし、大人向けのシリアスな内容を劇的に表現することを目指していました。その点から劇画は、マンガの新しい領域を開拓してストーリーマンガに大きな影響を与えました。しかし、日本での劇画に関する研究は、単行本や貸本マンガに対する研究が主になっており、新聞劇画に関してはほとんどありません。一方、韓国で新聞漫画の研究は盛んに行われていますが、劇画研究は、ようやく始まったばかりです。したがって、私は、1コマ、4コマの新聞漫画とは異なる新聞劇画の研究を目指しています。

韓国の劇畫(극화、クッフア、geukhwa)という用語は、日本の〈劇画(ゲキガ、gekiga)〉に由来したものです。しかし名称は類似していても、表現の著しい相違があります。本発表では、特に性描写の差に注目して、劇画における韓日の相違点を、その時代の社会状況を比較して考察します。

韓国の劇画の中で今回研究対象として取り上げるのは、韓国マンガ史上、初めて新聞に掲載された〈劇画〉高羽榮の「林巨正」です。当時、新聞は、1コマ、4コマの時事マンガが主に載せられるメディアと見なされていたので、画期的な出来事でした。「林巨正」は、1972年1月から1年2ヶ月の間、『日刊(イルガン)スポーツ』に連載され、これをきっかけに、スポーツ新聞に劇画時代が到来しました(図1.『日刊(イルガン)スポーツ』1972, 1, 1)。

それとは対照的に日本の劇画は、貸本文化から生まれてきて、ほとんどが貸本漫画の雑誌や単行本の形で出版されました。しかし、日本の新聞を調べた結果、同時代に日本にも新聞劇画があったということがわかりました。この日本の新聞に掲載された劇画と「林巨正」を比較することで、韓国の新聞劇画の特徴を解き明かすことができると考えられます。また、それぞれの劇画の特徴が、1970年代初頭の社会的な環境にどれほど裏付けられているかを検討してみようと思います。

まず、〈劇画〉という用語についてももう少し言及しておきましょう。韓日マンガを比較する際、日本が韓国に影響を及ぼしたという史実が注目を引くからです。「林巨正」が連載される前に出た社告記事のタイトルに、〈漫画小説〉(만화소설)という語が付け加えられました(図2.『日刊(イルガン)スポーツ』1971, 12, 30)。しかし、新聞連載が終わった後、1974年

2月に「林巨正」が単行本として出版された際（図3『高羽榮・林巨正』1974, 2）、タイトルに〈画(劇画)〉という用語が付いていました。この〈画(劇)〉という文字は日本でしか使われていなかった略字です。その文字を使用したこと自体が、日本からの影響を示唆しています。具体的には、〈劇画〉というジャンル名を提唱した辰巳ヨシヒロ(1935~)を挙げなければなりません¹。彼の〈劇画〉は、笑いの要素をなくし、デフォルメした表現より写実的な画風であり、シリアスな内容を扱った大人向けのものを指します。

しかし、高羽榮(1938~2005)²は、辰巳と異なって〈劇画〉を、根本的にマンガ形式による小説として解釈し、さらに笑いと楽しさを強調しています。スポーツ新聞を読む読者を念頭に、楽しく〈面白い劇画〉を目指していました。つまり、写実的な画調で、大人むけのシリアスな内容を劇的でありながら、諧謔的に表現することが彼の劇画です。

「劇画」という用語およびその代表作がどのように日本から韓国に渡ってきたかについての一般論をここで進めるつもりではありません。それよりも「林巨正」と日本の劇画界との関係に注目しましょう。「林巨正」を日本の新聞劇画と比較するため、1972年を中心に日本の3大日刊紙(『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』)とスポーツ新聞(『日刊スポーツ』、『スポーツニッポン』、『報知新聞』、『夕刊フジ』)に載せられた劇画形式のマンガがあったのかについて調べました。その結果、「林巨正」とほぼ同じ時期に『報知新聞』に「忘八武士道」が連載されていたことが判明しました(図4『報知新聞』1971, 10, 19)。さらに、1970年に韓国の『日刊(イルガン)スポーツ』と日本の『報知新聞』が取材及び通信業務に関する提携をしたという記録もありました。

『報知新聞』に、原作・小池一雄(1936~)、作画・小島剛夕(1928~2000)の時代劇画「忘八武士道」が1971年10月19日から1972年1月31日まで連載されていました。原作者の小池一雄と作画者の小島剛夕は、劇画『子連れ狼』で欧米でも広く知られています。彼らの「忘八武士道」は、新聞連載後、1972年5月10日に『報知グラフ』(隔月刊版雑誌)の劇画特集に含まれ、また、1973年1月4日に講談社から単行本の形で出版の運びとなりました。さらに、1973年2月に東映映画社から映画化されました。

次に、ほぼ同じ時期に新聞連載のあった「林巨正」と「忘八武士道」を、その表現の特徴という観点から比較してみたいと思います。

「林巨正」は、16世紀に実在した人物をめぐる長編歴史小説『林巨正』を脚色して制作された劇画です。物語は、林巨正を中心にして、民衆を救済する義賊たちの話ではありますが、その

¹ 辰巳ヨシヒロ『劇画大学』ヒロ書房、1968年、p14、p16

「マンガイコール滑稽さという観念には、どうしても抵抗を感じた。マンガはおもしろくなければいけない(この場合のおもしろさは笑い)のはどうしてだろう[略]。人物の心理を少し掘りさげて描く場合マンガ的な表現はどうしても邪魔になることがある。ストーリーが写実的なことを主体とした場合、表現も写実的でないと絵空ごとになって効果が半減する。」

² 高羽榮『高羽榮のストーリー』cine21、2008年、p.187

「劇画マンガはどんな原作をモデルにしようが、または純粋な創作でも一つのテーマを中心に小さな小説のように引いて行かなければならない。これは劇画を描く要領で生命だ[中略]時事漫画の読者と劇画マンガの読者はマンガ家に対して要求するものが違う。時事漫画の読者は文や言葉で表現できない抑圧された怒りを代弁してくれることを願う。しかし劇画マンガの読者は〈楽しむために〉、〈エンジョイズム(造語、enjoyism)〉を要求している点を分かなければならない。」(『週刊中央』1974、6、16記事)

中に挿入されている多様なエピソードが笑いと諷刺によって面白さを付け加えています。それと比べて、「忘八武士道」³は、完全に架空のストーリーからなっています。

物語は、江戸時代、幕府公認の遊郭である吉原を舞台にしています。売春のウラ稼業を取り仕切る忘八者と呼ばれる集団と、凶状持ちの主人公の明日死能、そして幕府と諸大名の勢力争いを絡めて展開される時代劇です。アクションが中心になっていますが、性的な表現も多くあります。大人向けのシリアスな内容で、笑いがない日本の劇画の特徴が見られます。

二作の表現形式については、大きく分けて四つの相違点が挙げられます。

第一に、前述したように、「林巨正」は、笑いを誘います。特に女好きな徐林と女性とのエピソードの描写では、笑いが込み上げてくる場面が少なくないです。

それとは正反対に、「忘八武士道」は全般的にユーモラスな要素の欠落が特徴だと言えます。

第二に、劇画の解説文が挙げられます。それは、絵で表現しにくい部分を紹介し、読者に物語の背景の理解を助けるための方法として機能していますが、「忘八武士道」の場合は、物語進行を支える解説文が多いのです（図5『報知新聞』1971, 10, 26）。それと比べて、「林巨正」における解説文は物語進行の機能に限らず、単なる解説を超える言語表現をもって読者を想像豊かな世界に導きます。シリアスな劇画に、スラップスティック・コメディの要素と諷刺的な表現が加えられて愉快的笑いを呼び起こします。

具体例を挙げてみましょう。（図6『日刊（イルガン）スポーツ』1972, 12, 29）

第305回で徐林と道で出会った女との情事を描いた場面で彼らの関係を現代のボクシングの試合に喩える解説文があります。それは、過去と現在を交錯させることによって諷刺的な効果をもたらします。特に5番目のコマは、性に関する諷刺と見なすことができますが、別の視点から見れば、弱者（女性）が権力者（徐林）をTKOしたようにも映ります。徐林は、韓国の1550年代の身分の高い人が被る帽子で権力者を象徴してもいます。1970年代の韓国は、軍事政権で権力者に対する民衆の不満が多い時代だったので、読者に痛快な気持ちを与えながら笑わせたと考えられます。

次に第339回を見ましょう（図7『日刊（イルガン）スポーツ』1973, 2, 10）。

韓国の朝鮮時代、林巨正が活動した1550年代が舞台となっているにもかかわらず、外国語を使った比喩と友達間の対話形式のような文が見られます。

4番目のコマは、絶壁で徐林の妻が突き落とされる場面ですが、Miracleと言うことを新約聖書の物語でキリストが二匹の魚と5個のパンで数千人を食べさせたと言われる奇跡に喩えて表現されています。

次に第27回を見ましょう（図8『日刊（イルガン）スポーツ』1972, 2, 3）。歴史的な事実の中で展開されるストーリーの通時的な流れから脱して、東洋と西洋を行き交う共時的な表現で、漫画的な楽しさを加えています。

左から14番目のコマは、当代の怨讐の家である尹家と李家の戦いをシェークスピアの『ロミオとジュリエット』に比喩してコミカルに描かれています。

このように、「林巨正」の解説文は、読者と交感し、楽しさを共有する場所として使われています。また、多様な解説方式を通じてアクションが主になる劇画の中に味付けのような笑いを加

³ 「忘八武士道」の4回（報知新聞、1971年10月22日）、12コマ目のセリフで「忘八」の意味を、「仁・義・孝・悌・忠・信・廉・恥の八ツを忘れた無法者、人にして人にあらず…人たる姿を借りた鬼畜外道の集まり【略】」と記している。

えています。

第三にアクションの表現ですが、「忘八武士道」は、戦闘、暴力、拷問など残酷な場面が生々しくリアルに描写されています（図9『報知新聞』1971, 12, 1）。主人公は、人斬りが稼業ですので、サムライのように大義名分が立つ闘いを見せません。刀剣で人の身体が斬られ、バラバラに飛び散る瞬間の描写が多くあります。

しかし、「林巨正」では、戦闘の場面において剣の動きに注目させる描写が多く見られます。352回は、林巨正と尹元ピンの戦いの場面ですが、華麗な剣術と強い力が入った動線で迫力のある描写になっています（図10『日刊（イルガン）スポーツ』1973, 2, 25）。林巨正は、怪力の持ち主ですが、力を発揮して人を助ける義賊として描かれています。

第4に性的表現ですが、「忘八武士道」は、遊郭を舞台にしているのも、女性の露出と性的な場面が多くあります。しかも、新聞という全世代向けのメディアに載せるマンガとして驚くほどの過激な性表現がリアルに描写されています（図11『報知新聞』1972, 1, 18）。性的な表現の役割が中心的だったのは、新聞連載の後に『ポルノ時代劇－忘八武士道』というタイトルで映画化されたことにも現れています。

「忘八武士道」とは対照的に、「林巨正」には、露骨な性表現は見当たりません。第12回（図12『日刊（イルガン）スポーツ』1972, 1, 16）で見られるような暗い部屋で性行為を暗示するコマが多いのです。つまり、性行為が間接的に表現され、またこの間接的な表現は、性描写（あるいは当時の、性描写の規制）に対する諷刺にも見えます。

大人が読むマンガとしての劇画においては、性表現は欠かせませんが、性表現の相違が注目に値します。

大人向けの劇画である韓日2作は、大きな性表現の差を見せていますが、原因はどこにあるのでしょうか。

劇画は、その出発点から従来のマンガにはない描写に挑戦して、そのため、映画との交流を重視していました⁴。また、映画は、公共性の高いジャンルとして、各時代の社会や文化との密接な関係にありました。従って、2作の劇画とその社会的環境との関係を、特に映画文化を媒介に探ってみたいと思います。具体的には、連載時の1970年の前後を中心にして、韓国の『日刊（イルガン）スポーツ』、日本の『日刊スポーツ』と『報知新聞』における映画関連記事および映画広告を検討しました。この資料を手がかりに、当時の日本（あるいはその文化産業・マスコミ）が、性に対する開放的な雰囲気が高まっていたということが分かります。

しかし、韓国においては、軍事政権の時代であり、演芸検閲が厳しかったので⁵、新聞などのマスメディアは、性に対して開放的な態度を取ることができませんでした。「林巨正」連載の直前、1971年12月6日〈国家非常事態の宣言〉後にすべての演芸検閲がさらに強化されました。

日本が、どれほど性に対して開放的だったのか、その具体的な例を挙げてみましょう。

⁴ 斧田小『アクス』第61号、青林工藝舎、2008年、p193

「アニメや舞台の演出をマンガに取り入れた手塚作品はストーリーテリングに革新的な変化をもたらしたが、劇画はそこによりリアルな、いわば実写映画的な効果を取り入れた表現であった。」

⁵ ベ・スギョン「韓国の映画検閲制度の変遷に関する研究」中央大学校先端映像大学院、2004年12月、p70

当時の映画検閲の記録によると修正、返却の比率は、70年3.7%、71年25%、72年58%、75年80%に至る。

第一に、韓国のスポーツ新聞に全然見当たらないポルノの関連記事が、日本の新聞には当然であるかのように多く載せられていました。ポルノ俳優のヌード写真が載せられた記事（図 13『日刊スポーツ』大阪版、1971, 10, 25）、ポルノ俳優の公開オーディションについての記事（図 14『報知新聞』大阪版、1971, 11, 8）、ポルノ・ショップを紹介する記事（図 15『日刊スポーツ』東京版、1971, 11, 9）、ポルノを扱った「蠟（ロウ）人形館」についての記事などが見つかりました（図 16『日刊スポーツ』東京版、1971, 10, 28）。これ以外にもポルノに関する記事が数多くありましたが、それとは対照的に韓国の新聞に、性に関する記事はあまりなく、ポルノという言葉は登場しません。

第二に、1970年代前半に、当時の韓国では公開されることのないポルノ映画と大人向けのエロ・アニメが、日本ではブームを起こしていました。図 17（『日刊スポーツ』東京版、1969, 9, 26）は、ポルノ映画と成人アニメが2本同時に上映される映画の広告です。この時期は手塚治虫（1928～1989）もエロティシズムを強調した成人アニメ『千夜一夜物語』、『クレオパトラ』を制作していました。しかも、ギャグ漫画家・谷岡ヤスジ（1942～1999）は、成人アニメに〈ポルノラマ〉という用語を使っています（図 18『日刊スポーツ』東京版、1971, 9, 18）。この時代に、日本で「ポルノ」と呼ばれた物には、性的な拷問、虐待、ドキュメント映画が多くありました。映画広告に挿入された、新聞や雑誌のポルノ関連記事も、この時期のポルノブームを示しています。

それとは対照的に、韓国では1969年から1970年4月までに性（SEX）と言う言葉さえ広告に載ることはなかったのですが、1970年5月、『房（部屋）の明かりを消してください』というタイトルの映画に〈この映画は果たしてセックス映画なのか？〉という宣伝文句が付いていました（図 19『日刊（イルガン）スポーツ』1970, 5, 25）。その後、1970年末まで、性的な描写が多い映画は、それほど多くはありませんが、続いていくつか上映されていました。しかも、ポルノ映画のようにみられる映画も一つありました（図 20『日刊（イルガン）スポーツ』1970, 7, 17）。しかし、その小さい広告には、ポルノという言葉ではなく〈成人映画〉が採用されています。

こうして、1960年代末以降、日本社会は、韓国と対照的に性描写開放の時代でありました。それは、〈安保闘争〉⁶による政治的な問題と関係があったとも考えられます。2度の「安保闘争」やそれをめぐるカウンターカルチャーは結局「敗戦」して、多くの人たちを絶望させました⁷⁸。政治に挫折した青年たちにとって劇画を読むことは反抗の継続であると同時に、現実逃避的な娯楽でもあったと言われています⁹。それを背景にこの時期から劇画のエロティシズム表現が多くなることは偶然ではありません。「忘八武士道」は、日本の新聞に掲載される劇画として、当時の社会状況に反応して、画期的な試みでした。

⁶ <http://ja.wikipedia.org> 安保闘争

安保闘争（あんぼとうそう）とは、1959年（昭和34年）から1960年（昭和35年）、1970年（昭和45年）の2度にわたり、日本で展開された日米安全保障条約（安保条約）に反対する労働者や学生、市民が参加した日本史上で空前の規模の反政府、反米運動とそれに伴う政治闘争であると同時に、火炎瓶や鉄パイプで暴力を振るう暴動・紛争という側面も持っていた。

⁷永山薫『エロマンガ・スタディーズ』、イースト・プレス、2006年、p36

⁸呉智英『現代マンガの全体像』、双葉文庫、2007年 p151

⁹夏目房之介・竹内オサム『マンガ学入門』、ミネルヴァ書房 2009年 p49

「林巨正」は、スポーツ新聞に載せられてはいても、単なる娯楽に限らないユーモアと諷刺が生きている劇画として特有の存在感を表しています。「林巨正」の作者は、新聞メディアを通じて劇画の領域を開拓し、諷刺的な表現方法で、いわば「笑える劇画」を生み出しました。当時の軍事政権の存在は、これに大きく影響を与えたと思われます。「林巨正」のようなマンガは、軍事政権下での様々な制約がある生活の中で、読者に諧謔的な笑いを与えたからです。このように「林巨正」と「忘八武士道」は、かなり違う表現方法を見せてはいますが、それぞれは、その時代の社会において特定の役割を果たしてきました。ご清聴ありがとうございます。

*図 (※注意：画像は無断で転載しないでください)



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20

参考文献

- 李萬燮,高羽榮『国会報』国会事務處
(이만섭,고우영 『국회보』 국회사무처)、2001年6月(416回)、p67
- 吳圭原『韓国漫画の現実』悦話堂(오규원 『한국만화의현실』 열화당)、1981年
- イム・ボン「人間として高羽榮、マンガ家として高羽榮」『高羽榮のストーリー』cine21
(임범 「인간고우영과만화가고우영」 『고우영이야기』 씨네 21)、2008年
- ハン・ヨンジュ『見直す私たちマンガ』富川漫画情報センタ(한영주 『다시보는우리만화』 부천만화정보센타) 2001年
- 高羽榮『高羽榮のストーリー』cine21(고우영 『고우영이야기』 씨네 21) 2008
- 黄・ミンホ『ゴバウからドルイまで』ソゾ(황민호 『고바우에서둘리까지』 서조)、1997年
- 李海暢『韓国時事漫画史』一志社(이해창 『한국시사만화사』 일지사) 1982年
- ソン・サンイク『韓国漫画通史』、プレスビル、(손상익 『한국만화통사』 프레스빌)、1996年
- 尹映玉『韓国新聞漫画史』悦話堂(윤영옥 『한국신문만화사』 열화당)、1995年
- ユ・ソンヨン『韓国時事漫画』韓国言論財団(유선영 『한국시사만화』 한국언론재단) 2000年
- 高羽榮『雲の中の子供』子音と母音(고우영 『구름속의아이』 자음과모음)、2007年
- パク・ジェドン他『韓国漫画の先駆者たち』悦話堂
(박재동의 『한국만화의선구자들』 열화당)、1995年
- 洪命憲『林巨正』四季節出版社(홍명희 『임격정』 사계절출판사)、2008年
- カク・ヒョハン他「スポーツ新聞と大衆文化」『Konkuk media & communications. 1』
建国大学校言論弘報大学院(곽효환외 「스포츠신문과대중문화」 『Konkuk media & communications. 1』 건국대학교언론홍보대학원)、1998年、pp89-110
- ベ・スギョン「韓国の映画検閲制度の変遷に関する研究」中央大学校先端映像大学院
(배수경 「한국 영화검열제도의 변천에 관한연구」 중앙대학교 첨단영상대학원)、2004年
- 歴史問題研究所『歴史批評』季刊30号、歴史批評社、1995年
- 高羽榮『林巨正』子音と母音(고우영 『임격정』 자음과모음)、2006年
- 高羽榮『高羽榮・林巨正』企画出版社(고우영 『고우영・임격정』 기획출판사)、1974年
- 高羽榮『林巨正』宇石(고우영 『임격정』 우석)、1985年
- 高羽榮『林巨正』宇石(고우영 『임격정』 우석)、1994年
- 辰巳ヨシヒロ『劇画大学』、ヒロ書房、1968年
- 永山薫『エロマンガ・スタディーズ』、イースト・プレス、2006年
- 吳智英『現代マンガの全体像』、双葉文庫、2007年
- 夏目房之介・竹内オサム『マンガ学入門』、ミネルヴァ書房 2009年
- 斧田小『アクス』第61号、青林工藝舎、2008年
- 米沢嘉博『前後エロマンガ史』青林工藝舎、2010年
- 小山昌宏『戦後「日本マンガ」論争史』、現代書店、2007年
- 小池一夫(別筆名；小池一雄)『キャラクター原論』小池書院、2005年
- 原作・小池一雄、作画・小島剛夕『忘八武士道』講談社、1973年1月4日
- 原作・小池一雄、作画・小島剛夕『忘八武士道』報知グラフ(劇画特集版)、1972年5月10日、表紙

原作・小池一雄、作画・小島剛夕『忘八武士道』スタジオ・シップ 1983年

韓国の新聞

『日刊スポーツ(일간스포츠)』、1969-1973年

日本の新聞

『朝日新聞』、1971-1972年

『毎日新聞』、1971-1972年

『読売新聞』、1971-1972年

『日刊スポーツ(東京、大阪)』、1969年-1972年

『スポーツニッポン』、1972年

『報知新聞(東京、大阪)』、1969年-1972年

『夕刊フジ』、1972年

<http://movie.walkerplus.com/mv19651/> 『ポルノ時代劇-忘八武士道』

<http://isplus.joinmsn.com/edit/ilgan/history.html> 韓国の『日刊スポーツ(일간스포츠)』、公式ホームページ。

<http://news.naver.com/main/read.nhn?mode=LSD&mid=sec&sid1=103&oid=033&aid=0000006286> 週刊京郷(주간경향)、2005年5月6日、高羽榮(고우영)に関する記事。

<http://hochiyomiuri.co.jp> 報知新聞小史

<http://ja.wikipedia.org>、手塚治虫

<http://ja.wikipedia.org>、谷岡ヤスジ

<http://ja.wikipedia.org> 安保闘争